保育の中での食べること

○高橋　陽子　　伊集院　理子　　伊藤　綾子　　上坂元　絵里　　佐々木　麻美
佐藤　寛子　　杉浦　真紀子　　灰谷　知子　　渡辺　満美　　（お茶の水女子大学附属幼稚園）

Ⅰ．はじめに

幼稚園では、弁当、誕生会のおやつ、園庭の実り、餅つきの餅、皆で作るカレーなど、生活の中で「食べる」場面はいろいろある。本園では、園庭中央にある花壇を夏場は畑にし、年長児がいろいろな野菜を種や苗から育て、収穫した野菜を園庭で調理して、年少児にふるまったり、食べたりする経験を重ねている。

「食べること」は、いろいろなものを食べられるようになったり、丈夫な体を作ったりすることに結びつくことであるが、保育の中で食べることには、もっといろいろな意味が含まれていると考える。

そこで、園での「食べる」ことにまつわる事例を通し、子どもの姿や関わり合う様子から、「食べること」について考察する。

Ⅱ．事例

事例1 「食べないからね」　　3歳児12月

毎年恒例の餅つきの日の朝、A 児は「餅は嫌い。食べないからね」と宣言して登園してきた。園庭に出て餅つきの様子は興味深く見ていた。つきたての餅に触れたり味わったりする「ちぎり食べ」では、口をへの字に曲げ、手は後ろに隠し、餅を受け取ろうとさえしなかった。他の子どもたちは、つきたての餅を、嬉しそうに食べたり伸ばしたりしていた。教師は、「あったかいよ」「ちょっと触ってみたら？」など声をかけたが、背を向け、最後まで受け取らなかった。

＜考察＞A 児は入園以来、新しいことには構えがちで、こだわりが強い面があった。おもちゃを抱え込む、砂場で汚れても着替えないなど、教師も困ってしまうような場面があった。それでも教師は、もやもやした気持ちを様々に表してくる A 児の思いを受け止め、本児のペースを尊重しつつ、気持ちに寄り添うようにしてきた。そのような生活の中で、ありのままの自分でいてよいことは感じとっていたのだろう。この日の A 児は、友達の嬉しそうな表情やワクワクした周りの雰囲気を感じながらも、「食べられない」という気持ちをそのまま表したのだと考える。

事例2 かかしをつくる　　5歳児6月

年長組の子どもたちが中央花壇を畑にし、野菜の苗を植えた。しばらくするとトマトが小さい実をつけた。それに気付いた年長児は、毎日柄杓で水をやりながら、赤くなるのを楽しみにしていた。そんな矢先、年中児がまだ青いトマトを数個採ってしまった。緑色のトマトを食べたことがあったという理由に納得しつつも、「赤くなる前にまた採りたくなっちゃうかも」と心配そうな年長児。どうしたらいいかを教師も一緒に考えていると、「かかしをつくってみたら？」と B 児が提案し、かかし作りに挑戦することになった。棒を十字に組んで畑に立て、胴体は古Tシャツ、頭は新聞紙を詰めたスーパー袋で作る。「つるつる頭は変だね」と麦わら帽子を被せると、かかしらしくなった。C 児が目と鼻を書き入れると、D 児が「私も作る！」と2体目の作成に取りかかり、できあがると、園庭の畑に並べて置いた。その後はかかしのおかげもあって、畑の野菜は無事に収穫の時を迎えることができた。

＜考察＞園庭の中央にある花壇を畑にする取り組みはここ数年続けている。手をかけて野菜を育てていく活動が、他の学年の子どもたちの目に触れやすい園庭の中央で営まれていることの意味はとても大きい。年長児が大事に世話をし、大きく育った野菜を収穫する。そして自分たちで調理し、幼稚園中にふるまい、みんなで味わう。年長児も昨年はごちそうになる立場だった。収穫前のトマトを思わず採ってしまった年中児に「とらないでください」と注意するのではなく、かかしを作ることで伝えようとした子どもたちの発想は、昨年からの体験のつながりがあったからこそだと感じた。見守り、世話し、育てた野菜は、みんなで食べるとよりおいしい。子どもたちはそれを体験から感じ取っているのだろう。手作りのかかしは、畑の野菜のみならず、みんなの暮らしを守る存在となった。

事例3 「幼稚園のスイカ、おいしいね」　　5歳児9月

5月にスイカの苗を植え、世話を続けてきた。みんなで食べ頃を楽しみにしている中、E 児は「スイカ嫌いなんだよな」とつぶやき、周りから驚かれていた。2学期早々収穫しみんなで食べることになった。降園前、丸く並べられた椅子に座って待っていると、年中組の教師がスイカをお盆に載せて持ってきてくれた。スイカが真っ二つに割れた瞬間、思わず歓声があがった。さらに30等分に切り分けていくと、気分はますます盛り上がった。一人一切れずつスイカが配られ、E 児も自然に手を伸ばし、スイカを口にした。担任が近づくと、「幼稚園のスイカ、おいしいね」と笑顔で言った。E 児の発言を聞いた周りの子どもたちも、思わず笑顔になった。

＜考察＞年中から入園してきたE児は初めての活動に対して身構えることが多く、クラスに馴染むのにも時間がかかった。見慣れない食べ物を取り入れることにも抵抗がある様子だった。しかし、4歳、5歳と共に過ごしていく中で、新しいことも少しずつ受け入れ、安心して過ごすようになってきていた。特に野菜の栽培には意欲的に取り組み、みんなで手をかけ、生長を見守り、収穫して食べる喜びを、共に経験してきた。スイカを苦手としていた E 児だが、スイカに対するみんなの思いやその場の雰囲気、教師の支えなどは、しっかりと感じとっていたのだろう。だからこそ、スイカを口にした時に「おいしい」という言葉が出たのではないかと考える。

Ⅲ．まとめ

みんなで食べる時「食べない」と言う子どもがいる。教師は、食べることをためらっている子どもの気持ちを受け止め、無理に勧めるのではなく、その気持ちに向き合ったり共感したりしながら、自発的に食べることを待つ。自分から食べた時、たとえほんの少しであっても、食べられたという「嬉しさ」や「自信」につながる。そして、「食べる」「受け入れる」「自分らしく表現する」意欲に結びついていくのだと考える。

園庭中央の畑で野菜を育てることで、子どもたちは野菜の生長を間近に見たり感じたりしていく。手をかけることで生長する野菜を見て喜ぶ年長児。その姿を見て憧れる年少児。前年の経験から、その場で調理して少しずつを大切に分かち合う嬉しさ、おいしさを知っていて、張り切ってふるまう年長児。年少児や仲間が喜んで食べる姿を見て、年長としての誇りを感じ、調理活動や、食べることにさらに積極的になっていく年長児。こうした、学年を超えた関わり合いの中で、園の暮らしが伝承されながら積み重ねられている。

「保育の中での食べること」は、「園の生活を受け入れ、自分らしく過ごすこと」、「共に暮らす仲間を感じること」、「関わり合いの中で育ち合うこと」に深くつながっているのだと考える。